

孔雀船

伊良子清白著



故郷の山に眠れる母の靈に

目次

漂泊	一
淡路にて	七
秋和の里	二
旅行く人に	五
島	一

海の聲	二
夏日孔雀賦	三
花賣	六
月光日光	六
華燭賦	七
五月野	三
花柑子	三

不開の間	三九
安乗の稚兒	一四
鬼の語	一五
戯れに	一六
初陣	一七
駿馬間答	一六
通計拾八篇	三

謝 野 村 武 郎
著 述 語 集
海 嶼
文 庫
三 卷 三 冊
一 冊 二 冊

孔雀船

漂泊

江戸に
秋風吹いて
河添の旅籠屋さびし

伊良子清白著

哀れなる旅の男は
夕暮の空を眺めて
いと低く歌ひはじめぬ

亡母は
處女と成りて
白き額月に現はれ

亡父は
童子と成りて
圓き肩銀河を渡る

柳洩る
夜の河白く
河越えて煙の小野に

かすかなる笛の音ありて
旅人の胸に觸れたり

故郷の
谷間の歌は
續きつゝ断えつゝ哀し
大空の返響の音と

地の底のうめきの聲と
交りて調は深し

旅人に
母はやどりぬ
若人に
父は降り

小野の笛煙の中に
かすかなる節は残り

旅人は
歌ひ續けぬ
嬰子の昔にかへり
微笑みて歌ひつゝあり

淡路にて

古翁しま國の
野にまじり覆盆子摘み
門に来て生鈴の
百層を驕りよぶ

白晶の皿をうけ
鮮けき乳を灑ぐ
六月の飲食に
けたまし虹走る
清涼の里いで
松に行き松に去る

大海のすなどりは
ちぎれたり繪巻物

鳴門の子海の幸
魚の腹を胸肉に
おしあてゝ見よ十人
同音にのぼり来る

秋和の里

月に沈める白菊の
秋冷まじき影を見て
千曲少女のたましひの
ぬけかいでたるこゝちせる

佐久の平の片ほとり
あきわの里に霜やおく
酒うる家のさゞめきに
まじる夕の鴈の聲

蓼科山の彼方にぞ
年経るおろち棲むといへ

月はろくとうかびいで
八谷の奥も照らすかな

旅路はるけくさまよへば
破れし衣の寒けきに
こよひ朗らのそらにして
いとゞし心痛むかな

旅行く人

雨の渡に

順禮の

姿寂びしき

夕間暮

霧の山路に

駕昇の

かけ聲高き

朝朗

旅は興ある

頭陀袋

重きを土産に

歸れ君

悪魔木暗に

ひそみつゝ

人の財を

ねらふとも

天女泉てんじゆいづみに

下り立ちくだりたちて

小瓶洗せうびんせんふも

目に入めにいらむ

山蛭やまひる膚はだに

谷たにに薬水やくすい

吸すひ入いらば

溢あふるべく

船醉海せんまひうみに

苦くるしむも

龍神臟りゆうじんざんを

醫すべし

鳥の戸に

火は燃えて

山に地獄の

吹嘘聲

潮に異香

薫ずれば

海に微妙の

蜃氣樓

暮れて驛の

町に入り

旅籠の門を
くゞる時

米の玄きに

驚きて

里に都を

説く勿れ

女房語部

背すりて

村の歴史を

講ずべく

主膳夫

雉子きじを獲えて

旨うまいの羹かたし

とゝのへむ

芭蕉ばせうの草鞋わらじ

ふみしめて

圓位えんいの笠かさを

頂いたけは

風俗ふうぞく君きみの

鹿島かしま立たち

翁おきなさびたる

可笑おかしさよ

鳥

黒潮の流れて奔る
沖中に漂ふ島は

眠りたる巨人ならずや
頭のみ波に出して

峨々として岩重れば
目や鼻や顔何ぞ奇なる

裸々として樹を被らず
聳えたる頂高し

鳥啼くも魚群れ飛ぶも
雨降るも日の出入るも

青空も大海原も
春と夏秋と冬とも

眠りたる巨人は知らず

幾千年頑たり愕たり

海の聲

いさゝむら竹打戦ぐ
丘の徑の果にして
くねり可笑しくつらくに
しげるいそべの磯馴松

花も紅葉もなけれども
千鳥あそべるいさごちの
渚に近く下り立てば
沈みて青き海の石

貝や拾はん莫告藻や
摘まんといひしそのかみの

歌をうたひて眞玉なす
いさごのうへをあゆみけり

波と波とのかさなりて
砂と砂とのうちふれて
流れさゞらぐ聲きくに
いせをの蟹が耳馴れし

音としもこそおぼえざれ

社をよぎり寺をすぎ
鈴振り鳴らし鐘をつき
海の小琴にあはするに
澄みてかなしき簫となる

御座の灣西の方
和具の細門に船泛けて
布施田の里や青波の
潮を渡る蟹の兒等

われその船を泛べばや
われその水を渡らばや

しかず纜解き放ち
今日は和子が伴たらん

見ずやとも邊に越賀の松
見ずやへさきに青の峰
ゆたのたゆたのたゆたひに
潮の和みぞはかられぬ

和みは潮のそれのみか
日は麗らかに志摩の國
空に黄金や集ふらん
風は長閑に英虞の山
花や郡をよぎるらん

よしそれとても海士の子が
歌うたはずば詮ぞなき
歌ひてすぐる入海の
さし出の岩もほゝるまん

言葉すくなき入海の
波こそ君の友ならめ

大海原おほうなばらに男をとこのこらは
あまの少女をとめは江えの水みづに

さても縑かとりの衣きぬならで
船路ふなぢ間ま近ぢかき藻もの被衣かっぎ
女なんなだてらに水底みづぞこの
黄泉國よもつくににも通かよふらむ

黄泉よみの醜女しこめは嫉妬ねたみあり
阿古屋あこやの貝かひを敷しき列つらね
顔美かほき子等こらを誘いざなひて
岩いはの櫃ひつぎもつくるらん

さばれ海うみなる底そこひには

父も沈みぬちゝのみの
母も伏しぬ柞葉の
生れ乍らに水潜る
歌のふしもやさとりらん

櫛も捨てたり砂濱に
簪も折りぬ岩角に

黒く沈める眼のうちに
映るは海の泥のみ

若きが膚も潮沫の
觸るゝに早く任せけむ
いは間にくつる捨錨
それだに里の懐しき

哀歌をあげぬ海なれば
花草船を流れすぎ
をとめの群も船の子が
袖にかくるゝ秋の夢

夢なればこそ千尋なす

海のそこひも見ゆるなれ
それその石の圓くして
白きは星の果ならん

いまし蟹の子艦拍子の
など亂聲にきこゆるや
われ今海をうかがふに

とくなが顔は蒼みたり

ゆるさせたまへ都人

きみのまなこは朗らかに

いかなる海も射貫くらん

傳へきくらく此海に

男のかげのさすときは

かへらず消えず潜女の
深き業とぞ怖れたる

われ微笑にたへやらず

肩を叩いて童形の

神に翼を疑ひし

それもゆめとやいふべけん

島こそ浮べくろくと
この入海の島なれば
いつ羽衣の落ち沈み
飛ばず翔らず成りぬらむ
見れば紫日を帯びて

陽炎ひわたる玉のつや
つやくわれはうけひかず
あまりに軽き姿かな

白ら松原小貝濱
泊つるや小舟船越の
昔は汐も通ひけむ

これや月日の破壊ならじ

潮のひきたる煌砂
うみの子ならで誰かまた
かゝる汀に灰白き
鏡ありとや思ふべき

大海原と入海と

こゝに迫りて海神が

こゝろなくさや手すさびや
陸を細めし鑿の業

今細雲の曳き渡し

紀路は遙けし三熊野や

白木綿咲ける海岸に
落つると見ゆる夕日かな

夏日孔雀賦

園の主そのに導みちびかれ
庭にはの置石おきいし石燈籠いとうろう
物古ものふるる木立こだち築山つきやまの
景有けいありる所ところうち過すぎて
池いけのほとりを來きて見みれば

棚につくれる藤の花
紫深き彩雲の
陰にかくるゝ鳥屋にして
番の孔雀砂を踏み
優なる姿睦つるゝよ
地に曳く尾羽の重くして

歩はおそき雄の孔雀
雌鳥を見れば嬌やかに
柔和の性は具ふれど
綾に包める毛衣に
己れ眩き風情あり
雌鳥雄鳥の立並び

砂にいざよふ影と影
飾り乏き身を耻ぢて
雌鳥は少し退けり
落羽は見えず砂の上
清く掃きたる園守が
箒の痕も失せやらず
一つ落ち散る藤浪の

花を啄む雄の孔雀
長き花總地に垂れて
歩めば遠し砂原
見よ君來れ雄の孔雀
尾羽擴ぐるよあなや今
あな擴げたりことぐく
こゝろ籠めたる武士の

晴の鎧に似たるかな
花の宴宮内の
櫻襲のごときかな
一つの尾羽をながむれば
右と左にたち別れ
みだれて靡く細羽の
金絲の縫を捌くかな

圓く張りたる尾の上
圓くおかるゝ斑を見れば
雲の峯湧く夏の日
炎は燃ゆる日輪の
半ば蝕する影の如
さても面は濃やかに
げに天鷲絨の軟かき

これや觸れても見まほしの
指に空しき心地せむ

いとゞ和毛のゆたかにて
胸を纏へる光輝と

紫深き羽衣は
紺地の紙に金泥の

文字を透すが如くなり
冠に立てる二本の
羽は何物直にして
位を示す名鳥の
これ頂の飾なり
身はいと小さく尾は廣く
盛なるかな眞白なる

砂の面を歩み行く
君それ砂といふ勿れ
この鳥影を成す所
妙の光を眼にせずや
仰げば深し藤の棚
王者にかざす覆蓋の
形に通ふかしこさよ

四方に張りたる尾の羽の
めぐりはまといふ薄霞
もとより鳥屋のものなれど
鳥屋より廣く見ゆるかな
何事ぞこれ圓らかに
張れる尾羽より風出で

見よ漣の寄るごとく
羽と羽とを疾くぞ過ぐ
天つ錦の羽の戦ぎ
香りの草はふまずとも
香らざらめやその和毛
八百重の雲は飛ばずとも
響かざらめやその羽がひ

獅子よ空しき洞をいで
小暗き森の巖角に
その鬣をうち振ふ
猛き姿もなにかせむ
驚よ御空を高く飛び
日の行く道の縦横に
貫く羽を搏ち羽ぶく

雄々しき影もなにかせむ
誰か知るべき花蔭に
鳥の姿をながめ見て
朽ちず亡びず價ある
永久の光に入りぬとは
誰か知るべきころなく
庭逍遙の目に觸れて

孔雀の鳥屋の人の世に
高き示しを與ふとは
時は滅びよ日は逝けよ
形は消えよ世は失せよ
其處に残れるものありて
限りも知らず極みなく
輝き渡る様を見む

今われ假りにそのものを
美しとのみ名け得る

振放け見れば大空の
日は午に中たり南の
高き雲間に宿りけり
織りて隙なき藤浪の

影は幾重に匂へども
紅燃ゆる天津日の
焔はあまり強くして
梭と飛び交ひ箭と亂れ
銀より白き穂を投げて
これや孔雀の尾の上に
盤渦巻きかへり進り

或は露と溢れ零ち
或は霜とおき結び
彼處に此處に戯るゝ
千々の日影のたゞすまひ
深き浅きの差異さへ
色薄尾羽にあらはれて
涌來る彩の幽かにも

末は朧に見ゆれども
盡きぬ光の泉より
ひまなく灌ぐ金の波
と見るに近き池の水
あたりは常のまゝにして
風なき晝の藤の花
静かに垂れて咲けるのみ

今夏いまの日の初はじめとて
菖蒲あやめ苳かり葺ふく頃ころなれば
力ちからあるかな物の榮はえ
若わかき緑みどりや樹まきは繁しげり
煙けぶりは深ふかし園そのの内うち
石いしも青葉あなばや萌もえ出いでん

栗しぐくこぼるゝ苔こひの上うへ
栗しぐくも堅かたき思おもひあり
思おもへば遠とほき冬ふゆの日ひに
かかの美うつくしき尾なも凍こほる
寒さまき埒ねらに起おき臥ふして
北きた風かぜ通かよふ鳥屋とやのひま
雙ふたつの翼つばさうちふるひ

もとよりこれや靈鳥の
さすがに羽は亂さねど
塵のうき世に捨てられて
形は薄く胸は瘦せ
命死ぬべく思ひしが
かくばかりなるさいなみに
鳥はいよく美しく

奇しき戦や冬は負け
春たちかへり夏來り
見よ人にして桂の葉
鳥は御空の日向ひ
尾羽を擴げて立てるなり
讚に堪へたり光景の
庭の面にあらはれて

雲を驅け行く天の馬
翼の風の疾く強く
彼處蹄や觸れけんの
雨も溶き得ぬ深緑
澱未だ成らぬ新造酒の
流を見れば倒しまに
底ことくくあらはれて

天といふらし盃の
落すは淺黄瑠璃の河
地には若葉の神飾り
誰行くらしの車路ぞ
朝と夕との雙手もて
撃ぐる珠は陰光
溶けて去なんず春花に

くらべば強き夏花や
成れるや陣に驕慢の
汝孔雀よ華やかに
又かすかにも濃やかに
千々の千々なる色彩を
間なく時なく眩ゆくも
標はし示すたふとさよ

草は靡きぬ手を舉げて
木々は戦ぎぬ袖振りて
即ち物の證明なり
かへりて思ふいにしへの
人の生命の春の日に
三保の松原漁夫の
懸る見してふ天の衣

それにも似たる奇蹟かな
こひねがはくば少くも
此處も駿河とよばしめよ

斯くて孔雀は尾ををさめ
妻戀ふらしや雌をよびて
語らふごとく鳥屋の内

花耻かしく藤棚の
柱の陰に身をよせて
隠るゝ風情哀れなり
しばく藤は砂に落ち
ふむにわづらふ鳥と鳥
あな似つかしき雄の鳥の
羽にまつはる雌の孔雀

花賣

花賣娘名はお仙

十七花を賣りそめて

十八戀を知りそめて

顔もほてるや耻かしの

蝮に噛まれて脚切るは

山家の子等に驗あれど

戀の附子矢に傷かば

毒とげぬくも晩からん

村の外れの媪にさく

昔も今も花賣に

戀せぬものはなかりけり
花の蠱はす業ならん

市に艶なる花賣が
若き脈搏つ花一枝
彌生小窓にあがなひて
戀の血汐を味はん

月光日光

月光の

語らるらく
わが見しは一の姫
古あをき笛吹いて
夜も深く塔の

階級ききうに白々しろしろと
立たちにけり

日光にっこうの

語かたるらく

わが見みしは二つぎの姫ひめ
香木かうぼくの髓ずゐ香かる

槽たな桁げや白乳はくにゅうに
浴ゆみして降ふりかゝる
花姿はなすがた天人てんじんの
喜よろこ悦びに地つちどよみ
虹にじたちぬ

月光げっこうの

語るらく

わが見しは一の姫

一葉舟湖にうけて

霧の下まよひては

髪かたちなやましく

亂れけり

日光の

語るらく

わが見しは二の姫

顔映る圓柱

驕り鳥尾を觸れて

風起り波怒る

霞立つ空殿を

七尺の裾曳いて
黄金の跡印けぬ

月光の

わが見しは一の姫に
死の島の岩陰に
語るらく

青白くころび伏し
花もなくむくろのみ
冷えにけり

日光の

わが見しは二の姫に
語るらく

城近く草ふみて
妻覓くと來し王子は
太刀取の耻見じと
火を散らす駿足に
かきのせて直走に
國領を去りし時
春風は微吹きぬ

華燭賦

律師は麓の
寺をいで

駕は山の上
竹の林の

夕の家の

門かどに入りぬ

親戚うぢ誰たれ彼かれ

宴えんをたすけ

小皿こざしの音おと

厨くりやにひゞき

燭しきを呼よぶ聲こゑ

背戸せとに起おきる

小桶こづきの水みづに

浸ひたすは若菜わかな

若菜わかなを切きるに

俎板まな馴なれず

新あらたしき刃はの

痕もなければ

菱形なせる

窓の外に

三尺の雪

戸を壓して

静かに暮るゝ

山の夕

夕は

樂しき時

夕は

清き時

夕は

美しき時うつくしきとき

この夕ゆふ

雪ありゆきあり

この夕ゆふ

月ありつきあり

この夕ゆふ

宴ありうたげあり

火の氣弱きをひのけおろきを

憂ひてうれひて

籠にのみかまどにのみ

立つなたつな

室に入りてむろに入りにて

花の人を見よ

花の人と

よびまゐらせて

この夕は

名をいはず

この夕は

名なし

律師席に入て

霜毫威あり

長人を煩はすに

堪へたり夕

琥珀こはくの酒さけ

酌くむに盃さかづきあり

盃さかづきの色いろ

紅くれないなるを

山人やまびと驕おごり奢ごりに

長ちやうずと言いふか

紅くれないは紅くれないの

芙蓉ふきぎの花はなの

秋あきの風かぜに

折をれたる其その日ひ

市いちの小路こうぢの

店みせに獲えたるを

律師りし詩しに堪た能のう

箱の蓋に

紅花盃と

書して去りぬ

紅花盃を

重ねて

雪夜の宴

月出でたり

月出でたるに

島臺の下暗き

島臺の下

暗き

蓬萊の

松の上まつの上に

斜たがひにおとす

光ひかりなれば

銀ぎんの錫すず懸か

用もち意いあらむや

山やまの竹たけより

笹ささを摘つみて

陶たわ瓶びんの口くちに

挿させしのみ

王わう者じやの調てう度どに

似にぬは何なに々々

其その子この帶おびは

うす紫の
友禪染の

唐縮緬か

艶ある髪を

結ぶ時は

風よく形に

逆らひ吹くと
怨ずる恨

今無し

若き木樵の

眉を見れば

燭を剪る時

陰かげをうけて

額かみ白しろき人ひと

室むろにあり

袴はかまのうへに

手てをうちかさね

困こまずる席せきは

花はなのむしろ

筵むしろの色いろを

評ひやうするには

まだ唇くちびるの

紅べにぞ深ふかき

北きたの家いえより

南の家みなみのいえに

來くる道みちすから

得えたる思おもひは

花はなにあらす

蜜みつにあらす

花はなよりも

蜜みつよりも

美うつくしく甘あまき

思おもひは胸むねに溢あふれたり

雷いかづち落ちて

簀やぶを焼やきし時とき

諸もろ手に腕かひなを

許せし人は

今相對ひて

月を挾む

盃とるを

羞る二人は

天の上

若き星の

酒の泉の

前に臨みて

香へる浪に

恐づる風情

紅花盃

琥珀の酒

白き手より

荒き手にうけて

百の矢

うくるも
去るな二人

御寺の塔の

扉に彫れる

神女の戯

笙を吹いて

舞ふにまされる

雪夜のうたげ

律師駕に命じて

北の家に行き

月下の氷人

去りて後

二人いさゝか

容儀を解きぬ

夜を賞するに

律師の詩あり

詩は月中に

桂樹挂り

千丈枝に

銀を着く

銀光溢れて

家に入らば

トする所
幸なりと

五月野

五月野の晝しみら
瑠璃轉の鳥なきて
草長き南國
極熱の日に火ゆる

謎と組む曲路
深沼の岸に盡き
人形の樹立見る
石の間青き水

水を截る圓肩に
睡蓮花を分け

のぼりくる美し君
柔かに眼を開けて

玉藻髪捌け落ち
眞素膚に翻へる浪
木々の道木々に倚り
多の草多にふむ

葉の裏に虹懸り
姫の路金撲つ
大地の人離野
變化居る白日時

垂鈴の百濟物

熟れ撓む石の上
みだれ伏す姫の髪
高圓の日に乾く

手枕の腕つき
白玉の夢を展べ
處女子の胸肉は

力ある足の弓

五月野の濡跡道

深沼の黒水

落星のかくれ所と

傳へきく人の子等

空像の數知らず

うかびくる岸の隈

湧き上ぼる高水に

いま起る物の音

めざめたる姫の面

丹穂なす火にもえて

たわわ髪身を起す
光宮玉の人

微笑みて下り行く
湖の底姫の國
足うらふむ水の梯
物の音遠ざかる

目路のはて岸木立
晝下ちず日の眞洞
迷野の道の奥
水姫を誰知らむ

花柑子

島國の花柑子
高圓に匂ふ夜や
大渦の荒潮も
羽をさめほゝゑめり

病める子よ和の今
窓に倚り常花の
星村にぬかあてゝ
さめくとなけよかし

生をとめ月姫は
新なる丹の皿に

開命貴寶を盛り
よろこびの子にたびん

清らなる身とかはり
五月野の遠を行く
花環虹めぐり
銀の雨そとく

不開の間

花吹雪
まぎれに
さそはれて
いでたまふ
館の姫

蝕める
古梯
眼の前に
櫓だつ
不開の間

香の物
焚きさし
採火女
影動き
きえにけり
夢の華

處女むすめの

胸むねにさき

きざはしを

のぼるか

諸扉もろとびら

さと開あく

風かぜのごと

くらやみに

誰たぞあるや

色いろ蒼あはく

まみあけ

衣冠いかんして

東帯の
人立てり

思ふ今

いけにへ

百年を

人柱

えも朽ちず

年若き

つはもの

戀人を

持ち乍ら

うめられぬ

怪し瞳けしひとみ
炎ほのほに
身みは燃もえて
死しにながら
輝かがやける

何なにしらん

禁制いんせい
姫ひめの裾すそ
なほ見みえぬ
扉とびらとつ
白壁しろかべに
居かる蟲むし

春の日は
うつろなす
暮れにけり

安乗の稚兒

志摩の果安乗の小村
早手風岩をどよもし
柳道木々を根こじて
虚空飛ぶ断れの細葉

水底の泥を逆上げ

かきにごす海の病

そり立つ波の大鋸

過げとこそ船をまつらめ

とある家に飯蒸かへり

男もあらず女も出で行きて

稚子ひとり小籠に座り

ほゝるみて海に對へり

荒壁の小家一村

反響する心と心

稚子ひとり恐怖をしらず

ほゝるみて海に對へり

いみじくも貴き景色
今もなほ胸にぞ跳る
少くして人と行きたる
志摩のはて安乗の小村

鬼の語

顔蒼白き若者に
秘める不思議さかばやと
村人数多來れども
彼はさびしく笑ふのみ

前まへのひむら日村を立た出しで、
 仙せん者じゃがたけ嶽に登のぼりしが
 恐おそ怖れをいだ抱くもの、ことと
 山やまのけしき景色をかた語らはず
 傳つたへき聞くらく此この河なの
 きはまるところ所たき瀧ありて

其そのれより奥おくにい入るものは
 必かならずやま山の崇たけあり

蝦が蟆ま氣を吹ふいてた立ち曇くもる
 篠しの竹たけ原はらをわ分け行ゆけば
 冷ひえしてのひら掌あらはれて
 頂うなにかほ顔に觸ふるゝとぞ

陽炎高さ二萬尺
黄山赤山黒山の
劍を植ゑたる頂に
秘密の主は宿るなり

盆の一日は暮れはて
淋しき雨と成りにけり

怪しく光りし若者の
眼の色は冴え行きぬ

劉邦未だ若うして
谷路の底に蛇を斬りつ
而うして彼れ漢王の
位をつひに羸ち獲たり

この子も非凡山の氣に
中たりて床に隠れども
禁を守りて愚鈍者に
鬼の語を語らはず

戯れに

わが居る家の大地に
黒き帝の住みたまひ
地震の踊の優なれば
下り來れと勅あれど
われは行きえず人なれば

わが居る家の大空に
白き女王の住みたまひ
星の祭の艶なれば
上り來れと勅あれど
われは行きえず人なれば

わが居る家の古厨子に
遠き御祖の住みたまひ
とこ降る花のたへなれば
開けて來れとのたまへど
われは行きえず人なれば
わが居る家の厨内

働く妻をよびとめて
夕の設をたづぬるに
好める魚のありければ
われは行きけり人なれば

初陣

父よ其手綱を放せ
槍の穂に夕日宿れり
數ふればいま秋九月
赤帝の力衰へ
天高く雲野に似たり

初陣の駒鞭うたば
夢杳か兜の星も
きらめきて東道せむ

父よ其手綱を放せ
狐啼く森の彼方に
月細くかゝれる時に

一すじの烽火あがらば
勝軍笛ふきならせ
軍神わが肩のうへ
銀燭の輝く下に
盃を洗ひて待ちね
父よ其手綱を放せ

髪かみ 皤しろ くきみ老おきな いませり
花はな 若わか く我わが 胸むね 踴おど る
橋はし を断た ちて砲たづ おしならべ
巖いは 高たか く劍つるぎ を植う ゑて
さか落おと し千丈ぢやう の崖がけ
旗はた さし物もの 亂みだ れて入い らば
大雷たいらい 雨う 奈落ならく の底そこ

風寒かぜさむ しあゝ皆血みなち 沙しほ

父ちち よ其手そのて 綱つな を放はな せ
君きみ ちばしうたゝ寝ね のまに
繪卷ゑまき 物もの 逆さか ぎに開ひら きて
夕ゆふ べ星波ほしなみ 間ま に沈しづ み
霧きり 深ふか く河か の瀬せ なりて

野の草に亂るゝ螢
石の上悪氣上りて
亡跡を君にあらせん

父よ其手綱を放せ
故郷の寺の御庭に
うるはしく列ぶおくつき

栗の木こそよげる夜半に
たゞ一人さまよひ入りて
母上よ晩くなりぬと
わが額をみ胸にあてゝ
ひたなきになきあかしなば
わが望満ち足らひなん
神の手に抱かれずとも

父よ其手綱を放せ
雲うすく秋風吹きて
萩芒高なみ動き
軍人小松のかげに
遠祖らの功名をゆめむ
今ぞ時貝が音ひゞく

初陣の駒むちうちて
西の方廣野を驅らん

駿馬問答

使者

月毛なり連錢なり

丈三寸年五歳

天上二十八宿の連錢

須彌三十二相の月毛

青龍の前脚

白虎の後脚

忠を踏むか義を踏むか

諸蹄の薄墨色

落花の雪か飛雪の花か

生つきの眞白栲

竹を剥きて天を指す兩の耳のそよぎ
鈴を懸けて地に向ふ雙の目のうるほひ
舉れる筋怒れる肉
銀河を倒にして膝に及ぶ鬣
白雲を束ねて草を曳く尾
龍蹄の形驕驕の相
神馬か天馬か

言語道斷希代なり
城主の御親書
献上違背候ふまじ

駿馬の主

曲事仰せ候

城主の執心物に相應はず
夫れ駿馬の來るは
聖代第一の嘉瑞なり
虞舜の世に鳳凰下り
孔子の時に麒麟出るに同じ
理世安民の治略至らず
富國殖産の要術なくして

名馬の所望及び候はず

使者

御馬の具は何々
水干鞍の金覆輪
梅と櫻の螺鈿は

御庭の春の景色なり
鞆の縫物は
飛鳥の孔雀七寶の縁飾
雲龍の大履脊
紗の鞍屨
さて蘇芳染の手綱とは
人車記の故實に出で

鐵地の鐙は
一葉の船を形容たり
鞆鞆は
大總小總掛け交せて
五色の絲の縷絲に
漣組たる連着懸
差繩行繩引繩の

緑みどりに映はゆる唐錦からにしき
菱形ひし轡くわ蹄ひづめの鐵かね
馬うま裝束そうぞくの數々かずかずを
盡つくして召めされうづるにても
御ご錠違背じやうみ候さへふか

駿馬しゅんまの主ぬし

中々なかなかの事ことに候さへ
駿馬しゅんまの威德いかとくは金銀こんぎんを忌み候さへ

使し者しゃ

さらば駿馬しゅんまの威德いかとく

御物語候へ

駿馬の主

夫れ駿馬の威徳といつば
世の常の口強足駿
笠懸流鏑馬犬追物

遊戯狂言の凡畜にあらず
天竺震旦古例あり
馬は觀音の部衆
雜阿含經にも四種の馬を説かれ
六波羅密の功德にて
畜類ながらも菩薩の行
悉陀太子金色の龍蹄に

十丈の鐵門を越え
三界の獨尊と仰がれ給ふ
帝堯の白馬
穆王の八駿
明天子の徳至れり
漢の光武は一日に
千里の馬を得

寧王朝夕馬を畫て
桃花馬を逸せり
異國の譚は多かれども
類稀なる我宿の
一の駿馬の形相は
嘶く聲落日を
中天に回らし

蹄の音星辰の
 夜碎くる響あり
 躍れば長髪風に鳴て
 萬丈の谷を越え
 馳すれば鐵脚火を發して
 千里の道に疲れず
 千斤の鎧百貫の鞍

堅轡強鞭
 鎧かろく
 鞍ゆらく
 轡は噛み碎かれ
 鞭はうちをれ
 飽くまで肉の硬き上に
 身輕の曲馬品々の藝

碁盤立弓杖
 一文字杭渡り
 教へずして自ら法を得たり
 扱又絶險難所渡海登山
 陸を行けば平地を歩むが如く
 海に入れば扁舟に棹さすに似たり
 木曾の御嶽駒ヶ嶽

越の白山立山
 上宮太子天馬に騎して
 梵天宮に至り給ひし富士の峯
 高き峯々嶽々
 阿波の鳴門穩戸の瀬戸
 天龍刀根湖水の渡り
 聞ゆる急流荒波も

蹄ひづめにかけてかつしく
肝かん臆おそずか駈は早はやし
いつかな馳かりこ越こえつべし
そのほか戦せん場ぢやうのい砌みせは
風かぜのおと音ねにふ伏せ勢せいをき覺きり
雲くもをみ見みてう雨う雪せつをわきまふ
先せん陣ぢん先か駈が拔ひ駈が間ま牒び

又またはか合あ戦せん最も中なかのとき時とき
槍やり矛ぼこ箭や種たねヶし島しま
面めんをふりた躰たいをかはして
主しゆをかばふ忠ちゆうとゆう勇ゆうは
家い子こ郎らう等どうにい異ことならずず
かゝるめい名な馬ばはおく奥おくのまき牧まき
吾わ妻まのまき牧まき大だい山せん木き曾そ

甲斐の黒駒
その外諸國の牧々に
萬頭の馬は候ふとも
又出づべくも候はず
名馬の鑑駿馬の威徳
あゝら有難の我身や候

使者

御物語奇特に候
とうく城に立歸り
再度の御親書
申し請はゞやと存じ候

駿馬の主

かしまじき御使者候
及びもなき御所望候へば
いか程の手立を盡され
いくばくの御書を遊ばされ候ふとも
御料には召されまじ

法螺鉦陣太鼓
旗さし物笠符
軍兵數多催されて
家のめぐり十重二十重
関の聲あげてかこみ候ふとも
召料には出さじ
器量ある大將軍にあひ奉らば

其時こそ駒も榮あれ駒主も
 道々引くや四季繩の
 春は御空の雲雀毛
 夏は垣ほの卯花鶉毛
 秋は落葉の栗毛
 冬は折れ伏す蘆毛積る雪毛
 數多き御馬のうちにも

言上いたして召され候はん
 拜謁申して駿馬を奉らん

この篇『飾馬考』『騾全書』『武器考證』『馬術全書』『鞍鏡
 之辯』『春日神馬繪圖及解』『太平記』及び巢林子の諸作
 に憑る所多し敢て出所を明にす

左久良書房新刊圖書

國木田獨歩君著
小杉未醒君畫
滿谷國四郎君畫

小説
運命

製本費金七拾五錢 郵送費金六錢

◎要目◎運命論者◎巡查◎酒中
日記◎馬上の友◎悪魔◎歯の悲
み◎空知川の岸邊◎非凡なる凡
人◎日の出
『獨歩集』以外の傑作を網羅せり

馬場孤蝶君選
齋藤松洲君畫

詩集
春駒

製本費金參拾五錢 郵送費金四錢

現に睡る野を焼けば、胸の春駒戀を得て、わっさ
血汐に狂ふごと、燃えて歸れるかげろふや。白き鬘
ふりみだし、西に勢へる駿足の、みるみる丘をのぼ
りては、凱歌あぐる焔かな。あらおもしろのながめ
よと、はらばひて吹く牧の子が、すさびの笛は草な
れば、おのづからなる野の調。ほのほは高く天に和
ぎ、笛の音清く地に流れ、情想融くなる春風の、ま
た夢に入る紫野。

を
は
り

書圖刊新房書良久左

明治三十九年度

太平洋會力夕口グ

製本費金壹圓 郵送費金四錢

明治三十九年度

繪葉書 太平洋會參考堂

六枚壹組金貳拾錢 郵送費金貳錢

明治卅九年
春季太平洋
繪會展覽會
紀念繪葉書

六枚壹組金貳拾錢 郵送費金貳錢

寫眞文學記者
沙上寫隱新著

寫眞 小詩材 小影

製本費金貳拾八錢 郵送費金四錢

畫帖につゝむ初戀を、君よ咎むな胸に咲き、胸に散りにし小さき花、その懐かしみ誰か知る。夜、手枕のひとり寐に、有情の夢のかたらひや、曉、覺めてながめ入る、影は無心の笑まひかな。指僕ふる二十年の、名残の色は豈なりき、今は昔の匂ひさへ、黄曆日にまぎらふれや。さはれほのめくなまめきの、眼ざしに盡きぬ生命あれ、卷の寫繪かざかざた、瓦とすて、玉と止めむ。

書圖刊既房書良久左

齋藤 弔花 君 小品文集 心扉錄 (版再)

製本費 金參拾五錢
郵送費 金四錢

馬場 孤蝶 君 選著 詩集 花がたみ (版三)

製本費 金參拾四錢
郵送費 金四錢